

第3部 主な拠点施設における取組

1 市民活動の拠点施設

八戸ポータルミュージアム（はっち）

（1）施設目的と取組の方向性

八戸ポータルミュージアム「はっち」は、2011年2月に、新たな交流と創造の拠点として、賑わいの創出や、観光と地域文化の振興を図りながら、中心市街地と八戸市全体の活性化のために開設した公共の文化観光交流施設です。ポータルミュージアムという名前には、八戸の玄関口という意味があります。ここで八戸の情報を手に入れて、まちなかや観光地に誘う役目があります。また、愛称の「はっち」は公募から生まれたもので、八戸の「はち」を親しみやすくしたものと、卵のふ化や出入口などを意味する「hatch」にもちなんんでいます。

地上5階建ての館内は、空からの光が降り注ぐ八角形の中庭を中心に回遊できる設計となっており、1階から3階の観光展示は、まちをめぐるような回遊性が特徴です。1階にはカフェやショップ、開放感あふれる吹き抜けの広場があり、2階から4階には、「食」や「ものづくり」の起業家支援のスペースがあります。

また、芸術活動や市民活動をサポートする各種ギャラリーやスタジオ、そして多様なイベント開催が可能な大小2つのシアターを備え、さらに5階にはアーティストが市内に滞在しながら創作活動に取り組めるレジデンス施設を有しています。



（2）推進していく主な取組

2021年3月策定の第3期中期運営方針に基づき、新しい「つながり」や「にぎわい」を生み出し、「くらし」を豊かにするため、各種事業に取り組んでいます。

〇つながりをデザイン

市内各施設、コミュニティ、企業や団体、市民等との連携・協働により、人やコトがつながる仕組みをつくる企画に取り組みます。また、新たなつながりを生み出すチャレンジを応援し、活動に基づくコミュニティづくりに取り組みます。

〇にぎわいをデザイン

商店街、農商工生産者、高等教育機関、市民等との連携・協働により、ローカルな経済が潤い、賑わいを生み出す企画に取り組みます。また、クリエイティブな人材との連携による企画や、パフォーミングアーツなどの創造的な活動を応援するとともに、美術館や八戸ブックセンターなど、文化施設との事業連携により相乗効果を創り出し、文化創造の拠点化を図ります。

〇くらしをデザイン

伝統工芸や生活文化などその道のプロフェッショナルとの連携・協働により、グローバルな視点で暮らしをデザインする企画に取り組みます。また、ローカリティ（固有な地域性）に溢れ、暮らしを豊かにする市民活動を応援します。

八戸まちなか広場（マチニワ）

（1）施設目的と取組の方向性

八戸まちなか広場「マチニワ」は、2018年7月に、まちなかの「庭」をコンセプトに、光、緑、水などの自然を感じられる空間で、地区全体の魅力向上、にぎわいの創出、市民の交流促進、回遊性の向上、周囲への効果の波及等を促す新たな拠点として開設した公共広場です。

八戸で初めてのガラスの屋根つき広場で、雨や雪などの天候に左右されずに過ごせる多目的スペースです。朝6時から夜11時までオープンし、春から秋にかけては、風が通りぬける開放空間として、冬季は大型スライドガラスを閉じることで一定の快適性を保つことのできる憩いの空間として、活用できます。

地上2階建ての広場は八戸ポータルミュージアムで管理しており、シンボルオブジェ「水の樹」（水飲み場設備あり）が来場者を出迎えています。施設内には、ライブビューイングも可能な203インチの大型ビジョンや、可動式テーブル・椅子も備えており、休憩や待ち合わせはもちろんのこと、さまざまなイベントにも活用されています。



（2）推進していく主な取組

にぎわい形成につながる新たな都市空間として整備されたマチニワを、来場者のくつろぎの場として提供しつつ、人々が集まる仕掛けづくりにも取り組んでいます。

○サードプレイス（居場所）の創出

光・緑・水などの自然を感じられ、季節や時の移ろいを味わうことができ、多くの人にとって心地よいと感じられる場所を、まちなかに提供します。

○周囲をつなぐ洗練された空間の創出

入りやすさ・自由度・快適性を持つ場所として、「はっち」や周辺の民間施設を連携・相互補完するつながりとしての役割を担い、まちなかの回遊性向上に貢献します。また、シンボルオブジェ「水の樹」やイベントなどにより、人々が集まりたくなる場所を、まちなかに提供します。

○地域コミュニティの再生に寄与する拠点の創出

小路、ヒト、情報が交わる場所として、散歩・食事・待ち合わせ・読書・休憩などの日常的な活動で利用できる場所として存在しながら、飲食も可能で「ハレ」の場として楽しむことのできる自由な雰囲気のある場を、まちなかに提供します。

2 美術の拠点施設

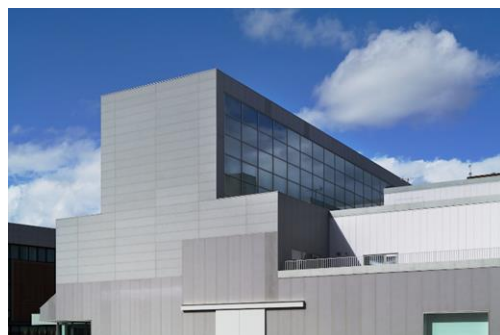
八戸市美術館

(1)施設目的と取組の方向性

八戸市美術館は、当市の文化芸術活動の推進に寄与してきた旧美術館からの建替・新築として整備され、「種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館 ～出会いと学びのアートファーム～」として、令和3年11月に開館する公共施設です。「美術館」の基本的な役割に、人々が互いに刺激し合いながら感性を高め、育まれる「アート学び」と、観光や地域コミュニティなど様々な分野を横断した総合的な文化政策を担う「アートのまちづくり」の3つの役割を融合させた美術館としての運営を図ります。

美術館の建物は、「学びの拠点（ラーニングセンター）」という考えのもと、エントランス機能に加え、人々が自由に集い、学び、活動する場としての役割も担う巨大空間の「ジャイアントルーム」と、それを取り囲むように、より深く学び、異なる専門性に偶然に出会える、個性ある個室群が配置されているのが特徴です。

八戸市美術館には、八戸の美や文化を伝える約3,000点の収蔵作品があります。これらを活用しながら、まちづくりや学びの要素を取り入れ、地域や社会に関する様々なテーマのもとに展覧会とプロジェクトで美術館の事業を構成し、従来の立場や枠組みを超えて、人や作品との出会いの輪を広げていきます。アートを通じた出会いや学びが人を育み、人の成長がまちを育む、みんなの「アートファーム」としての美術館を目指します。



撮影：阿野太一

(2)推進していく主な取組

○アートを介した社会参画の場づくり

アートを介して地域社会を育む様々なプロジェクトを、美術館に能動的に関わる市民等からなる「アートファーマー」との協働により実施するほか、世代や立場に関係なくあらゆる人々が作品や人と出会い、育まれるよう、ジャイアントルームを中心に誰にとっても居心地がよく、様々な過ごし方や活動が可能な場を創出します。

○小中高校との連携

小中高校の教員と美術館の学芸員、専門家等がプロジェクトチームを立ち上げ、一緒に研究活動を展開するラボを館内に設置し、学校現場で活用できるプログラムやツールの開発など、新しい美術教育のあり方を考え、実践します。

○大学・高専との連携

大学・高専が有する専門性と美術館の専門性を活用し、アートの力を異業種・異分野と融合させて新しい価値や活動を生み出す取組みを推進します。また、社会人や学生が美術館での学びを社会で実践できるよう、多様な人々が一緒に交流する機会やアートを通じた学びの場を提供します。

八戸クリニック街かどミュージアム

(1) 施設目的と取組の方向性

八戸クリニック街かどミュージアムは、2012年3月まで八戸クリニック産婦人科で院長を務めていた小倉秀彦氏の「文化面における社会貢献」と「地域への恩返し」の想いにより、同年4月に開館した文化施設です。

浮世絵などの日本の伝統木版画約3,000点、八戸ゆかりの鳥瞰図絵師・吉田初三郎の作品約2,000点(他の絵師の鳥瞰図約2,000点)、懐かしの映画ポスター約5,000点を所蔵しています。「八戸の街かどにある日本文化の意外な発見」をモットーに、有名な作品だけでなく、一時的に忘れられた秀作にも光を当て、豊かな文化・価値観・美意識に触れて頂くとともに、作品をしみじみと味わうひと時を提供することに努めています。

また、1,500冊を超える関連書籍も開館中は自由に閲覧することができます。

様々な作品との出会いは、豊かな感性と想像力を育むだけでなく、多様な価値観・文化の共生が求められる現代においては、日本文化を見つめ直すことにより、私達自身の価値観や文化の根源を再認識し、他者や異文化理解の基礎を築く一歩に繋がると考えています。当館は、未来へ向けて日本文化を考えるためにも、日本特有の発展を遂げた近世の大衆文化から近代化への流れを俯瞰する視点を持ち、作品の収集・研究をもとに、分かりやすく伝えていくことにも心がけています。なかでも、日本全国の鳥瞰図を描き一時代を築いた吉田初三郎への評価は年々高まっており、全国トップクラスを誇る吉田初三郎コレクションの活用もさらに進めていきます。



(2) 推進していく主な取組

○デジタルデータの活用と多様な連携

SNSやHP等の活用の他、地域の歴史文化を紹介する「はちのヘヒストリア」や、医療福祉分野との連携による「語りとつながり」のWEBサイト制作など、異分野との連携も発展的に継続していきます。

○まちづくりへの貢献

中心市街地の端にある文化施設として、八戸市美術館や八戸フォーラム・中心商店街などとの連携も積極的に行い、より良いまちづくりの一助となるよう貢献したいと考えています。

○研究と周知活動

国内外の研究に対する協力や書籍等への作品掲載を積極的に行い、日本文化や八戸ゆかりの吉田初三郎について広く伝えるとともに、地域の教育への還元を行っています。

帆風美術館

(1)施設目的と取組の方向性

帆風美術館は、(株)帆風の創始者・犬養俊輔氏の「企業の最終目的は社会貢献にある」の理念に基づいて設立されたものです。

地方では、文化面、特に、美術の世界においては、都会のように優れた美術を身近に鑑賞出来る環境が少なく、ましてや、国宝クラスの美術に接する機会も極めて少ないのが現状です。

帆風美術館は、まず、市民の皆さんのこの夢を実現すべく、全国に点在する国宝・重文や、質の高い作品を展示して、だれでも気軽に美に触れていただけるよう、入場無料で公開しております。

そして、この場を、現代人にとって最も必要な「感性」を磨く場として構築し、地域文化に貢献したいと考えております。

今、芸術に限らず何事にも豊かな感性が求められています。学問や知識では得られない感性を、ここで感得し発見し、その先に新しい美を育て、発信して欲しいと願っています。

交通の便の悪い小さな美術館ですが、美の鑑賞には最適の、自然に囲まれた環境にあり、小ツブながら、内容では中央にひけをとらないユニークな企画展を展開して、八戸市民の誇りとなるよう努力しております。



(2)推進していく主な取組

○日本の美を見つめなおす場

絵と表具を一体として鑑賞する掛軸は、日本独自の美意識が永年育んできた世界に類を見ない私たちの財産ですが、現代の社会生活においては、その存在は殆んど忘れ去られようとしています。優れた作品を展示して、作品と出会い、それが日本美への関心を深めていく力となることを願うものです。

○国宝・重文に触れる

全ての作品を原寸で制作し展示しています。もとより国宝や重要文化財は、公開される機会も少なく、たとえ複製画であっても身近に鑑賞できる意義は大きいものです。帆風美術館は、その夢を実現し、現在では多くの市民が本物を前にしたと同じ感動を味わい、日本古来の美を見つめ直しています。

○日本初、デジタル光筆複製画専門の美術館

日本画の絵具は劣化が著しいため、薄明かりの照明のもと、ガラス越しでの鑑賞を余儀なくされ、かつ、軸装がゆえに、長期間の展示が不可能でした。また、これまでの複製画は、どんなに質が高いといっても原画とはかなり異なり、鑑賞というレベルには程遠いもので、感動を与えるところまでは期待できませんでしたが、帆風美術館のデジタル光筆画の誕生によって、原画でしか得られなかった「生きた絵」としての鑑賞と、明るい照明のもと長期間の展示が可能になり、国宝・重文に息のかかるほど顔を近づけ、画家の等身大の息遣いまでも鑑賞できるようになりました。

3 舞台芸術の拠点施設

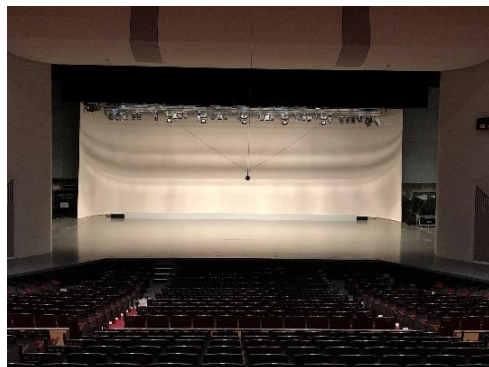
八戸市公会堂

(1) 施設目的と取組の方向性

八戸市公会堂は、芸術文化の普及及び振興を図るとともに、市民生活の向上に寄与することを目的に1975年4月に開館した公共施設で、現在は指定管理者制度を導入し、運営しています。

施設には1,532席を備える大ホールや492席を備える小ホールのほか、会議室、和室、展示室、調理室等があり、開館以来コンサートや大規模な大会、講演会のほか、指定管理者が実施する多様な芸術文化イベントが開催されており、多くの市民に利用され、当市の中心市街地における文化拠点施設の一つとして、地域の特性を活かした個性豊かな芸術文化の振興において重要な役割を担っています。

また、八戸市公会堂は災害時における避難所としての役割も担っており、令和元年度及び令和2年度には大ホール、令和3年度には小ホールの耐震改修工事を実施し、避難所としての機能を更に高めたほか、併せて、施設内にエレベーター、エスカレーターを設置し、多目的トイレを増設するなど、これまで以上に誰もが快適に芸術文化に触れることができる環境整備を進めています。



(2) 推進していく主な取組

○芸術文化イベントの充実

指定管理者が実施する文化事業・自主事業等において、これまで以上に多彩な催し物を検討・実施するほか、コンサートや演劇等の鑑賞型芸術文化イベントを積極的に誘致することで、市民がより多様な芸術文化に触れる機会の創出に取り組めます。

○市民参加型の創作（創造）プログラムの実施

経験の有無を問わず、誰もが実演芸術の創作活動に関わる市民参加型の芸術文化プロジェクトを、八戸市南郷文化ホールとの連携により企画・実施することで、地域文化の創造、芸術文化の次代の担い手の育成等、当市の芸術文化事業の更なる活性化に取り組めます。

※このページは八戸市公会堂と八戸市公民館を
1つの施設として取り扱っています。

八戸市南郷文化ホール（スィングベリーNANGO）

（1）施設目的と取組の方向性

八戸市南郷文化ホールは、芸術文化の発表及び鑑賞の機会を提供することにより、芸術文化の普及振興を図るとともに広域的文化交流を促進し、市民生活の向上に寄与することを目的に2008年3月に開館した公共施設で、現在は指定管理者制度を導入し、運営しています。

施設には450席を備えたホールがあり、コンサートや講演会等のほか、指定管理者が実施する多様な芸術文化イベントが開催されており、多くの市民に利用されています。

また、市では「アート」の持つ創造的な視点から南郷地区の地域資源を活用し、地域内外に魅力を発信することで、地域コミュニティの活性化や交流人口の増加に結び付けるとともに、南郷地域をはじめ当市の更なる魅力を創出することを目的に「南郷アートプロジェクト」を2011年にスタートさせ、八戸市南郷文化ホールをメイン会場として多種多様な事業を展開するなど、南郷地区における芸術文化活動の拠点施設としての役割も担っています。



（2）推進していく主な取組

○南郷地区における芸術文化の拠点施設としての役割の維持

2011年からスタートした南郷アートプロジェクトは、10年目の節目となる2020年をもって終了となりましたが、これまで培ったノウハウを活かし、今後も八戸市南郷文化ホールが南郷地区における芸術文化活動の拠点施設なるべく、新たな事業を企画・実施していきます。

○市民参加型の創作（創造）プログラムの実施

経験の有無を問わず、誰もが実演芸術の創作活動に関わる市民参加型の芸術文化プロジェクトを、八戸市公会堂との連携により企画・実施することで、地域文化の創造、芸術文化の次代の担い手の育成等、当市の芸術文化事業の更なる活性化に取り組みます。

○「練習場」としての機能維持

南郷文化ホールでは、練習のために施設を使用する場合、使用料をホール使用料は7割引き、附属設備の使用料は5割引きとする料金設定をしており、地元の音楽教室や楽団等が当該料金制度を活用し、日々練習に励んでいます。

今後も、当該料金制度を継続及び周知を行い、地域で活動する文化団体の練習場所としての機能維持に努めていきます。

デーリー東北ホール

(1) 施設目的と取組の方向性

デーリー東北ホールは、八戸市近郊にお住まいの皆様による文化的活動の発信地としてご利用いただくことを目的に、2015年4月に開設しました。

元輪転機（新聞の印刷機）工場跡地に建設された、13mの吹き抜けが特徴のホールとなっており、広さは約130㎡、最大120脚のイスを並べることができます。

グランドピアノ（貸出有料）を常設し、音楽ライブや落語、地元ゆかりの芸術家の個展など、文化的なイベントが多く開催されています。

また、2016年11月には、ホールに隣接するデーリー東北新聞社本社敷地内に「しんぶんカフェ」を開設しました。カフェでは全国各地の地方新聞が閲覧でき、八戸前沖さばを使った料理や、せんべい汁、いちご煮などの郷土料理を楽しめます。ホールと連動した施設として、地域コミュニティの活動拠点としての機能を一層強化させています。



(2) 推進していく主な取組

○「リアル体験」の拠点

デーリー東北新聞社は、「読むだけじゃない」「もっとつかって デーリー東北」をキャッチフレーズに、紙面に記載されたニュースや評論を、トークセッションやイベントとしても提供する「リアル体験事業」を展開しています。当ホールはこの重要拠点で、今後もリサイタルや講演会などの開催を強化します。

○立体的な展示の推進

当ホールの特徴は13メートルの吹き抜け空間で、高さを生かしたダイナミックな展示ができます。これまでも書道の展示会などで大作を展示し、好評を博してきました。出展者、来場者双方の感性を刺激する展示を進めて、地域の文化芸術活動を活性化させることを目指します。

○交流活動の支援

新型コロナウイルスの感染拡大により、いわゆる「3密」の回避が求められていますが、地域コミュニティ活動を維持するためには、人と人との交流が必要不可欠です。当ホールは、隣接するしんぶんカフェと連動して、文化芸術活動の発表会やスポーツ団体のファン感謝イベントなどを企画・開催し、交流活動を促して地域コミュニティの維持に努めます。

4 和の拠点施設

八戸市文化教養センター南部会館

(1) 施設目的と取組の方向性

八戸市文化教養センター南部会館は、昭和60年に建設された144畳の和室や舞台等を備える和風型の公共施設です。現在は指定管理者制度を導入し、運営しています。

また、南部会館の入口である「八戸城角御殿表門」は寛政9年に建設されたものであり、昭和56年に県重宝として登録されています。当施設は、伝統的文化の普及及び振興を図り、市民生活の向上に寄与することを目的として設置されており、舞踊、茶会及び各種展示等の様々な用途に活用されています。また、毎年、八戸三社大祭と八戸えんぶりの時期には、無料休憩所として施設を開放し、伝統芸能等に親しむことができる事業を開催しています。

当館の歴史的価値を含め、多くの市民に親しまれている南部会館が、その歴史を次代へ継承する取組を進め、また、市民が文化芸術活動等を行う場として、より活用されるための取組を進めていきます。



(2) 推進していく主な取組

○施設の活用による認知の拡大

伝統文化（日本舞踊や茶道等）の練習・発表や鑑賞の場としてだけでなく、南部会館を知らない・興味のない層へも認知が拡大することにつながるイベント等の企画・誘致を推進します。

○観光や他施設との連携

文化施設が多く集まる中心市街地に立地していることから、他の施設と連携したイベントの開催や一体的な広報活動を行うなど、回遊につながる取組を推進します。

また、観光コンテンツとしての価値を高めるために、観光客がただ施設を見学するだけでなく、体験等ができるプログラムを検討していきます。

八戸市立集会場（更上閣）

(1) 施設目的と取組の方向性

八戸市立集会場は、東北を代表する財閥であった八戸の泉山家の邸宅として明治30年頃に建設された「更上閣」と、「長根公園再編プラン」（平成25年）を基に、まちの賑わい形成に寄与する来街者の新たな回遊拠点として、平成30年に整備された「更上閣にぎわい広場」から成る公共施設で、現在は指定管理者制度を導入し、運営しています。

また、更上閣は明治期の基本的な純和風建築物として、平成15年に国の有形文化財に登録されています。

当施設は、市民が憩い、集える交流の場として位置付けられており、日本舞踊、大正琴、民謡、尺八、詩吟、太極拳等の愛好者や婦人団体をはじめ、多くの団体等が利用し、毎年2月にはお庭えんぶりが開催されるなど、文化団体等が活動を行う・文化を発信する場として親しまれております。

登録有形文化財である当施設が、市民の憩いの場として多くの方々に親しまれ、次代へ継承する取組を進め、また、市民が文化芸術活動等を行う場の一つとして、より活用されるための取組を進めています。



(2) 推進していく主な取組

○文化財の活用

伝統文化（日本舞踊や大正琴等）の練習・発表や鑑賞の場としてだけではなく、これまで文化財としての更上閣を知らない・興味のない層へ認知が拡大することにつながるイベント等の企画・誘致を推進します。

○観光や他施設との連携

文化施設が多く集まる中心市街地に立地していることから、他の施設と連携したイベントの開催や一体的な広報活動を行うなど、回遊につながる取組を推進します。

また、観光コンテンツとしての価値を高めるために、観光客がただ施設を見学するだけではなく、体験等ができるプログラムを検討していきます。

5 本の拠点施設

八戸ブックセンター

(1)施設目的と取組の方向性

八戸ブックセンターは、第6次八戸市総合計画の中で重点的に取り組むべき戦略の一つである「人づくり戦略」における、人材育成のための教育プロジェクト「本のまち八戸」構想に係る事業の一環で2016年12月に開設した公共施設です。

中心市街地の活性化に寄与するとともに、市民の豊かな心を育み、本のある暮らしが当たり前となる、文化の薫り高いまちを目指すため、本と出会う新たな機会の創出、本を通じた市民交流及びまちづくりの拠点施設としても位置づけています。

取り扱っている本は、地方の民間書店では採算面等の理由から積極的に扱いにくい、海外文学や人文・社会科学、自然科学、芸術などの分野を中心しつつ、知的好奇心を刺激し、読書の幅を広げるきっかけとなるような本を選書し、提案・編集型の陳列により、本との偶然的な出会いを創出することを心がけています。

また、「本を読む人を増やす」「本を書く人を増やす」「本でまちを盛り上げる」という3つの基本方針を掲げ、作家や編集者などを招いてのトークイベントなどを「読む」ことの楽しさを創出する企画や、小説や郷土史の書き方、電子出版の仕方など、執筆や出版に関するワークショップなど「書く」ことの楽しさを創出する企画、そして館内ギャラリーでの「本」にまつわる展示や、一箱古本市をメインとした「本のまち八戸ブックフェス」など、民間・公共を問わず様々な関係者と連携した事業を展開し、「本」をきっかけとしたまちづくりに取り組んでいます。

今後もこれらを継続実施し、「本」そのものや、「読むこと」「書くこと」がもっと市民の身近になるように、また、「本」を介して人の交流を促進することで、まちを元気に盛り上げていくことを目指していきます。



(2)推進していく主な取組

○ライター・イン・レジデンス

文化施設連携の一環で、はっちの「レジデンス」機能を活用し、国内外の作家を招聘あるいは公募し、八戸に一定期間滞在してもらい、八戸を題材にした執筆や市民向けのワークショップなどの交流を行うライティングプログラムを実施します。

○パワープッシュ作家事業の新展開

八戸ゆかりの作家を「推す」企画で、例えば小説を脚本化、芝居として創作する（小説×演劇）など、ジャンルをクロスオーバーする創造事業に、文化施設等の連携事業としてチャレンジし、作家や作品を広く紹介することに加え、本を起点とした新たな作品創作に取り組めます。

○出版に関する事業の検討

八戸市美術館や博物館などの文化施設が主催する企画の図録等、当市の文化発信に関する書籍を全国の書店で購入できるよう、出版事業の実施について検討を進めます。

八戸市立図書館（本館）

(1)施設目的と取組の方向性

八戸市立図書館は、旧八戸藩士の結社である弘観舎により明治7年に開設された八戸書籍縦覧所を前身とし、大正2年に県の認可を受け八戸町立図書館創立、昭和4年の市制施行により八戸市立図書館となりました。八戸書籍縦覧所の蔵書も継承しており、一説には日本最古の公共図書館とも言われている施設です。昭和59年に現在地に移転・新築しました。青森県重宝に指定されている八戸藩士の遠山家日記等貴重な古文書も所蔵しています。

昭和41年からは移動図書館による巡回貸出を開始し、現在も月1回市内50カ所を巡回しています。昭和46年からは公民館内にボランティアが運営する分室を設置し、現在は集会所に設置された1分室を含む6分室で地域の方々に図書を貸出しています。図書館は本館を中心として、2分館・6分室・移動図書館と連携を図りながら、「いつでも」「どこでも」「だれでも」利用できる図書館を目指し、市民一人ひとりが、生涯にわたって、豊かでいきがいのある生活を送ることができるよう、「読むこと」「知ること」を支援するため、資料の充実を図りさまざまなサービスを展開しています。



(2)推進していく主な取組

○図書館資料並びにサービスの充実

図書館資料充実のため情報収集する他、リクエストの受付や相互貸借も活用して多種多様な資料を収集し子どもから大人まで、それぞれの世代が求める資料を提供できるよう努めています。また、企画展示・おはなし会・講演会・講習会・朗読会・調べる学習コンクール・ブックスタートなどを実施し利用者サービスを充実させ、市民が資料に触れる機会を増やすよう取り組んでいます。

○関係機関との連携

子どもの読書環境の整備・読書活動の推進を図るため学校等の教育機関と連携、及び「本のまち八戸」が掲げる文化の薫り高いまちを目指し事業関係課と連携して、サービス向上に取り組んでいます。

○地域資料の保存公開

図書館で収集した、古文書・古記録・行政資料など、地域の歴史を物語る歴史資料を保存・管理し、良好な状態で後世へ伝えていきます。同時に、目録の公開や解説文の作成を進め、広く市民が利用できるよう努めます。また、講演会や講習会を開催し、地域への興味関心を深める機会を提供します。

八戸市立南郷図書館

(1)施設目的と取組の方向性

八戸市立南郷図書館は平成17年2月に南郷村立図書館として開館しました。開館前は中央公民館に併設する図書室があり、その蔵書を引き継いでいます。開館して2カ月後に八戸市と旧南郷村との合併により、八戸市立図書館の分館となりました。現在は指定管理者制度を導入し、運営しています。閲覧室は天井が高く側面のガラス部分が広く、明るくて開放的な印象です。ゆったりと配置された書架や閲覧席などが居心地の良い空間を創出しています。エントランスから閲覧室までの通路の壁面を「エントランスギャラリー」として地域の方々の文化活動を発表する場として提供しており、展示作品は来館者の目を楽しませて



います。また、八戸市出身の芥川賞作家三浦哲郎氏の愛用の文机や著書を展示した「三浦文学の部屋」を設置し郷土の作家を紹介しています。

市民一人ひとりがライフステージに合わせて、本に親しみ学ぶことができる生涯学習の場として、図書館サービスの充実と向上に努めています。

(2)推進していく主な取組

○資料収集と適正な蔵書管理

幅広い年齢層に合わせそれぞれが求める資料を幅広く収集します。また、南郷地区の特色に合わせジャズやそば、ブルーベリー等の特産品や地域に関する資料の収集し充実に努め、知的好奇心が刺激される魅力的な書架づくりを目指します。

○図書館利用の促進

市民に関心を持っていただけるような資料展示・イベント・ワークショップを企画をし、来館のきっかけ作りをします。また、毎月の図書館だよりの発行やSNSで情報を発信し図書館の多様なサービスを周知し図書館利用の促進に努めます。

○地域との連携

南郷地区の他施設との連携によるイベントの開催や、地域の催しに積極的に参加協力します。南郷地区の学校に定期的に訪問し、おはなし会やブックトークで読書活動を促進します。また、地域の高齢者支援の一助となるよう高齢者向けのおはなし会も開催します。

八戸市図書情報センター

(1) 施設目的と取組の方向性

八戸市図書情報センターは新幹線開業に合わせて平成14年に開館した八戸市立図書館の分館です。八戸駅ビルに入居しており、新幹線や在来線の乗降客が多いという特性から、八戸市民はもとより、旅行者の方や通勤・通学の方にも利用されています。現在は指定管理者制度を導入し、運営しています。

館内は約300㎡と限られたスペースであるため、視聴覚資料、雑誌を中心に資料の充実を図っています。利用カードを持っていない方でも視聴覚資料の視聴や資料の閲覧が可能であり、「知的なくつろぎの場」として館内で過ごすことができます。

館内の蔵書は少ないですが、市立図書館（本館）や南郷図書館から本を取り寄せ貸出するサービスを行い、近隣住民や通勤・通学者の読書環境の充実を図っています。また、近隣小学校との連携に力を入れており、出張おはなし会やブックトークを定期的に行う他、児童・生徒向けの読書案内を発行し、子どもと読書の橋渡しを担っています。



(2) 推進していく主な取組

○館内環境の整備

分かりやすい掲示物の作成や利用者がアクセスしやすい書架づくりなど、これまで以上に多くの方にとって利用しやすい施設となるよう館内の環境整備を検討・実施していきます。

○市内他館からの取り寄せサービスの推進

市立図書館や南郷図書館の資料を用いた展示を継続的に行い、利用者に他館資料の取り寄せサービスを積極的にPRし、近隣住民や通勤・通学者の利用促進に努めます。

○様々な年代の利用者が楽しめるイベントの実施

児童向けに実施している絵本福袋やガチャガチャ、図書の分類をキャラクター化した「分類男子・女子」、「八戸三社大祭」・「八戸えんぶり」のDVD上映や館内で所蔵CDを流す「おとの定期便」など、様々な年代の利用者が知的好奇心を育めるよう、今後も特色ある多彩なイベントを企画・実施していきます。

6 歴史・地域文化の拠点施設

八戸市博物館

(1)施設目的と取組の方向性

八戸市博物館は、八戸市の教育、学術及び文化の発展に寄与するため設置されたものです。八戸の風土から生まれ、先人達が守り育ててきた貴重な文化遺産を通じて、豊かな明日を考える場として、昭和58年に開館しました。国史跡根城跡の一角にあり、史跡のエントランス・ガイダンス施設を兼ねています。

常設展示は、“よみがえる歴史・ひらけゆく未来”をメインテーマに、考古・歴史・民俗・無形資料の4つの展示室から構成され、各室ともテーマごとに八戸の歴史を体系的に紹介しています。また、展示以外の収蔵資料は、考古・歴史・民俗の各分野別に設けられた3つ収蔵庫に収められています。収蔵資料には、重要文化財、重要有形民俗文化財（大久喜地区に設置の収蔵庫にも一部収蔵）、県重宝など指定文化財が含まれています。特別展示室では、ここを会場に例年特定のテーマによる特別展、企画展が開催され、講義室、体験学習室では、各種講演会や親子参加型の体験講座等を定期的に開催しています。

教育普及活動における学校教育への対応については、各校による展示の見学に加え、館内で各種体験学習を実施しています。また、各校の希望に応じて、実物資料を持参しての学芸員による出前授業を実施しています。

八戸市博物館は、県南地域における学術、文化の拠点施設の一つとして、多くの市民に利用されており、八戸市及び県内において重要な役割を担っています。



(2)推進していく主な取組

○学校教育及び幼児教育との連携

従来から学校教育への対応に取り組んできましたが、その内容や学習メニュー等について、学校教育現場と密に連携しながら充実を図ります。また、就学前の子どもを対象にした行催事を立案・実施することで、将来の自発的な施設利用につながるよう、市内の幼稚園・保育園等、幼児教育との連携も目指します。

○大学・研究機関等との連携・協働

市内外の大学・研究機関等と、考古・歴史・民俗の各分野に関する共同の調査研究の推進を図ります。

八戸市南郷歴史民俗資料館

(1) 施設目的と取組の方向性

八戸市南郷歴史民俗資料館は、旧南郷村により合併前の昭和55年に建設され、合併後に八戸市博物館の分館に編入されました。建物は展示室等のある本棟、資料収蔵庫棟、民具展示館からなっています。

常設展示室は、平成25年度に全面リニューアルを実施し、平成26年4月に再オープンしました。昭和をテーマにしており、戦時下の島守地区に構築されたトーチカを一部再現するなど、戦争関係資料を展示するコーナーがあります。

また、昭和2年にアメリカから親善大使として日本の各学校等に贈られ、島守小学校にも保存されていた「青い目の人形」が展示されています。さらに、戦後の町並みを再現し、当時の生活文化を紹介するコーナーが設けられています。特別展示室では、例年、特定のテーマによる特別展や企画展を開催しています。隣接する民具展示館は、移築した古い民家を活用したものであり、臨場感のあるかたちで民俗資料を展示しています。

学校教育への対応については、各校による展示の見学解説及び各種体験学習を実施しているほか、各校の希望に応じて、実物資料を持参しての学芸員による出前授業も実施しています。その他館外講座や、親子向けの遊びの体験行事を実施しています。また、市内及び八戸圏域の老人福祉施設の活動を応援するため、「回想法」用の実物資料を各種セットにして貸し出しています。

このように当館は、八戸市の南郷地域における教育・文化の拠点施設として重要な役割を担っています。



(2) 推進していく主な取組

○親子参加型の行催事の充実

学校教育への対応に加えて、将来の自発的な施設利用につながるよう、就学前の子どもを含む親子参加型の行催事を立案・実施します。

○回想法への対応

「回想法」用の実物資料セットについて、要望に応じた内容変更や新しいセットの追加を検討・運用します。

※回想法とは、高齢者に、昔の生活用具などを用いて過去の体験を語り合っていただくことで、高齢者自身の認知機能低下を予防して自主活動をめざす、一種の心理療法です。

八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

(1)施設目的と取組の方向性

八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館は、隣接する是川遺跡や風張1遺跡などを通して東北地方の優れた縄文文化を発信し、埋蔵文化財（遺跡）の積極的な公開活用と適切な保存管理を図る施設として、平成23年7月に開館した公共施設です。館事業として、埋蔵文化財調査、収蔵管理、展示、教育普及、調査研究、是川遺跡の整備活用などを実施します。

常設展示室は、是川中居・風張1遺跡の発掘成果及び重要文化財となっている出土品を中心に展示し、直感的に縄文人の芸術性に触れる「縄文の美」、是川遺跡の調査研究成果を通して学習する「縄文の謎」、国宝の合掌土偶を展示する「国宝展示室」などで構成されています。企画展示室では、是川遺跡や縄文に関わる多様なテーマ、埋蔵文化財に関わるテーマの特別展・企画展を実施します。

また、展示・体験学習・各種講座を開催するほか、遺跡の公開や図書の開架なども実施し、多くの市民や子どもたちに楽しく学べる機会を提供します。調査研究として、考古学や自然科学などのテーマを設定した共同研究などを実施し、その成果を館事業に活用していきます。

市民や来館者が八戸の魅力を再発見し、誇りや愛着が感じられるように努め、埋蔵文化財の重要性を伝えていきます。



(2)推進していく主な取組

○是川縄文の里整備

是川石器時代遺跡を史跡公園として整備し、文化・観光資源として活用していくとともに、是川遺跡クリーンデー（市民公募型清掃活動）を通じた是川遺跡の重要性と保存意識の醸成を図るほか、関係機関と連携して、世界遺産としての遺跡の保全はもとより、価値や縄文文化の多様な魅力を伝えていく取り組みを進めます。

○教育普及

縄文是川ボランティアの協力のもと、展示解説や各種縄文体験を実施するほか、小学校高学年向け副読本の作成・配布、八戸圏域小学校の施設利用及び修学旅行、校外学習など、積極的な受け入れに努めます。

○埋蔵文化財センター機能の充実

市内埋蔵文化財の発掘調査及び発掘調査出土品と調査記録写真等の収蔵資料のデータベース化、再整理、再収納を行い、効果的な活用を図ります。また、市内遺跡出土の金属製品や是川遺跡出土の重要文化財の保存修理を行い、展示公開などを進めていきます。

○調査研究の推進

大学等の研究機関との共同研究を実施し、その研究により蓄積された質の高い成果の公開活用を進めていきます。

八戸市縄文学習館（是川縄文館分館）

（1）施設目的と取組の方向性

八戸市縄文学習館は、平成23年7月の是川縄文館開館に伴い、是川縄文館分館としてリニューアルオープンした公共施設です。館内では、是川遺跡の保存に尽力された、地元の泉山岩次郎・斐次郎（あやじろう）兄弟の紹介や、是川遺跡と考古学者の関わり、埋蔵文化財センターの役割について展示解説しており、本館（是川縄文館）常設展示へのプロローグとなっています。

※史跡是川石器時代遺跡第1期整備工事のため、令和2年7月より令和8年度（予定）まで休館中。

